

幕末  
佐賀藩

# 近代化のトップランナー①

## 西洋人モ人ナリ、佐賀人モ人ナリ

第39回ユネスコ世界遺産委員会は7月5日、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の世界遺産登録を決定した。23の構成資産には佐賀県からも「三重津海軍所跡」が含まれている。

司馬遼太郎が「幕末、佐賀藩ほどモダンな藩はない」と述べたように、佐賀藩は、当時、日本の近代化のトップランナーだった。世界遺産登録を記念して、佐賀県立佐賀城本丸歴史館の学芸担当職員が、3回にわたって解説する。

「西洋人モ人ナリ、佐賀藩の反射炉築造の際に、賀人モ人ナリ、薩摩人モ同ジク人ナリ。退屈セス倍々研究スベシ」(『島津斉彬言行録』所収)。  
これは、英明の薩摩藩主島津斉彬(1809〜58年)が、嘉永5(1852)年に着手した同

18世紀後半のイギリス

県立佐賀城本丸歴史館 学芸員

浦川 和也



鍋島直正肖像写真 (公益財団法人鍋島報効会蔵)

から始まった産業革命の波は欧米諸国に波及し、鉄製大砲や蒸気機関を手

に入れた列強諸国は、国外市場や植民地の獲得を目指してアジアに向かった。文化5(1808)年の英軍艦フェートン号の長崎港侵入も、その流れの中で起こった事件だ

が、長崎警備を担当していた佐賀藩は、9代藩主鍋島齊直が通塞(謹慎刑)となるなど、大きな衝撃を受けた。

に長崎警備を視察し、その際にオランダ商船に自ら乗り込み船内を見学した。以後、直正のオランダ船乗り込みは恒例となり、アヘン戦争(1840〜42年)後の天保15(1844)年に開国勧告のため来日したオランダ軍艦パレンバン号にも直正は乗船し、艦内をくまなく視察した。

天保期には既に、直正は自らの目で西洋の進んだ文明を見出し、体感していたのだ。  
若き藩主のリーダーシップのもと、佐賀藩は、医学・理化学・軍事等の

# 島津斉彬からも一目

幕末佐賀にとつての「黒船」はフェートン号事件だと一般に言われる。しかし、実は、その後20年余り、佐賀藩でも近代化に向けた目立った動きはなかった。

佐賀藩の近代化への取り組みは、鍋島直正(1814〜71年)が10代藩主となった天保元(1830)年が起点となる。直正は、藩主となって初めて佐賀に入った直後

西洋技術を積極的に取り入れ、嘉永5(1852)年には、既に鉄製大砲の製造に成功していた。  
「鉄製石火矢(大砲)二百挺程の鑄立仰付けらるゝに、差支はなまじや」(『鍋島直正公伝』第四篇。嘉永6(1853)年、ペリー来航直後、老中首座阿部正弘は、緊急に佐賀藩に打診した。直正は50門を至急納品することを約束した。  
幕末、佐賀藩は、まさに日本の中の「西洋」だったのだ。

◆◆◆  
特別展「幕末佐賀藩の挑戦(チャレンジ)」、企画展「海外雄飛―閑叟と三重津海軍所―」は佐賀市の佐賀城本丸歴史館で9月23日まで。

紙面編集・小石 克

目 読 書

月 衣 食 住

火 健 康 ・ シ ニ ア

火 文 化 ・ 学 芸

水 教 育 ・ 若 者

木 趣 味 ・ 余 暇

金 文 化 ・ 学 芸

土 映 画